陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一首　并せて短歌

四〇九四番

葦原の　瑞穂の国を　天降り　知らしめしける　皇祖の　神の命の　御代重ね　天の日継と　知らし来る　君の御代御代　敷きませる　四方の国には　山川を　広み厚みと　奉る　御調宝は　数へ得ず　尽くしもかねつ　然れども　我が大君の　諸人を　誘ひたまひ　良き事を　始めたまひて　金かもたしけくあらむと　思ほして　下悩ますに　鶏が鳴く　東の国の　陸奥の小田なる山に　金ありと　申したまへれ　御心を　明らめたまひ　天地の神相うづなひ　皇祖の　御霊助けて　遠き代に　かかりしことを　朕が御代に　顕はしてあれば　食す国は　栄えむものと　神ながら　思ほしめしてもののふの　八十伴の緒を　まつろへの　向けのまにまに　老人も　女童もしが願ふ　心足らひに　撫でたまひ　治めたまへば　ここをしも　あやに貴み　嬉しけく　いよよ思ひて　大伴の　遠つ神祖の　その名をば　大久米主と　負ひ持ちて　仕へし官　海行かば　水漬く屍　山行かば　草生す屍　大君の　辺にこそ死なめ　顧みは　せじと言立て　ますらをの　清きその名を古よ　今の現に　流さへる　祖の子どもそ　大伴と　佐伯の氏は　人の祖の立つる言立て　人の子は　祖の名絶たず　大君に　まつろふものと　言ひ継げる　言の官そ　梓弓　手に取り持ちて　剣大刀　腰に取り佩き　朝守り夕の守りに　大君の　御門の守り　我をおきて　人はあらじと　いや立て思ひし増さる　大君の　命の幸の　聞けば貴み

反歌三首

四〇九五番

ますらをの　心思ほゆ　大君の　命の幸を　聞けば貴み

四〇九六番

大伴の　遠つ神祖の　奥つ城は　著く標立て　人の知るべく

四〇九七番

天皇の　御代栄えむと　東なる　陸奥山に　金花咲く